

分科会 C [自由] 文化

報告 1 周舒静（首都大学東京人文科学研究科博士後期課程）

テーマ「東アジアにおける『おしん』ブーム——中国大陸と香港の受容の比較」

NHK 連続テレビ小説第31作『おしん』（1983-1984）は日本テレビドラマ史上屈指の傑作であり、放映時62.9% という最高視聴率の記録を達成した。『おしん』はただのドラマのみならず、日本ソフトパワーの代表として、70 近くの国家や地域に輸出され、ヒューマニズム溢れる物語性によって、絶大な人気を集めた。

中国では、『おしん』が1985年に中央電視台によって放送された（中文題『阿信』）。80年代には国産テレビドラマの製作力がまだ低かったため、海外ドラマが放送時間の大部分を占めていた。1972年日中国交正常化以降、80年代の日中関係のハネムーン期になると、数多くの日本製ドラマや映画やアニメなどがこの時期に一気に中国市場に入ってきた。『赤い疑惑』（『血疑』）、『燃えろアタック』（『排球女将』）などのドラマは現在でも中高年の中国人の頭の中に残っている。『おしん』は主人公の辛抱強い、根性ある内面が「改革開放」政策実施後の社会風潮に合致していたため、中国の視聴者を魅了し、一世を風靡した。

一方、香港では1960年代から日本製ドラマの輸入がすでに行われていた。80年代になると、香港のドラマ製作力が次第に向上してきたが、テレビ局間の視聴率競争のため、日本製ドラマの放送は続いていた。『おしん』は1984年に香港無線テレビで放送された。ほぼ同時に、日本の大手スーパーチェーン店ヤオハン（八百伴）が香港に進出した。その創始者が実は『おしん』のモデルだという説は、ヤオハンの香港での発展を促した。しかも、無線が『おしん』を意図的に「婦女新姿」という時間枠で放送したことは、当時の女性意識の台頭と関係があると言えるだろう。

『おしん』が誕生して以来、各地でシンポジウムが開催され、多種多様な視点からの研究論文も少なくない。しかし、発展途上国と先進国でなぜ同じく人気を博したのかについてはまだ触れられていない。本報告はまず『おしん』の放送当時の新聞とテレビ雑誌の関係記事を踏まえ、中国大陸と香港での放送状況を考察する。続いて80年代の大陸と香港の社会背景、経済状況を説明しながら、『おしん』がブームになった理由を分析する。最後は『おしん』の発展途上国（中国）と先進国・地域（香港）の受容状況の考察を通じて、『おしん』は日本製ドラマの海外受容史上でどのように研究されてきたについて検討したい。

報告 2 張宇博（早稲田大学大学院文学研究科中国語中国文学コース）

テーマ「香港映画にみる越境と香港アイデンティティ」

映画の歴史において「越境」は一貫して重要なテーマの一つである。香港映画も初期から繰り返し境界線を超える人々を描いてきた。なかでも香港返還を控えた1980年代から90年代にかけては、「移民」を題材とする映画が数多く製作され、アメリカや欧米諸

国に渡る心の不安や苦悩を抱える人たちが描かれた。先行研究では、「六四事件」の衝撃と「九七返還」のもたらした不確定性により、香港映画が移民や逃亡に関する物語をたくさん製作するようになったことや、越境に伴い、異国と香港の間に置かれる香港人の香港アイデンティティの揺れが表現されていることが指摘されている。しかし、近年、「移民」とは異なる形の越境を描いた映画が脚光を浴びている。監督たちは越境に新たなスタイルを与えて、これまであまり表現されていない「越境」の意味を構築しているように思われる。

そこで、本発表では、こうした近年の香港映画における新たな越境が内包する意味、特に香港の人々のアイデンティティの変化について明らかにすることを目指す。これらの映画に関する先行研究としては、彭麗君(2018)「本土與跨本土」、「中港跨境的倒錯快感」などがあり、映画産業の視点から、香港映画人の越境と、その製作環境の変化、それに対応する姿勢と空間表現の多元性を論じている。しかし、彭の研究は映画産業に焦点を置いたため、映画作品によって表現されている香港人のアイデンティティの変化には触れていない。ほかにもこの時期の映画に関わる評論が多数あり、様々な視点を提供しているが、アイデンティティの変化に言及したものは多くない。本発表ではこうした知見も踏まえて作品のテキスト分析を行い、近年の映画における「越境」の特徴を析出する。それと同時に、1980年代以降、香港返還前後の「移民」を題材とする映画との比較分析を通じて、香港人のアイデンティティの変化について考察する。

それらによって、近年の香港映画における、越境に伴う香港の人々の心の変容が明らかになるはずである。